『モールドンの戦い』とトールキンの試み

Tolkien's Attempt at a Sequel to *The Battle of Maldon*

奥　西　洋　子

イギリスでは、学者が作家としても活躍する例が日本よりもはるかに多くみられ、羨ましいと思う。その場合、専門である学問が、どのように創作に関わっているかということも気になる点である。たとえば、オックスフォード大学で数学と論理学の教師であったルイス・キャロル（Lewis Carroll）は、論理を逆様にして不思議な世界を創り出し、以来、世界中で多くの人々を魅了し続けている。

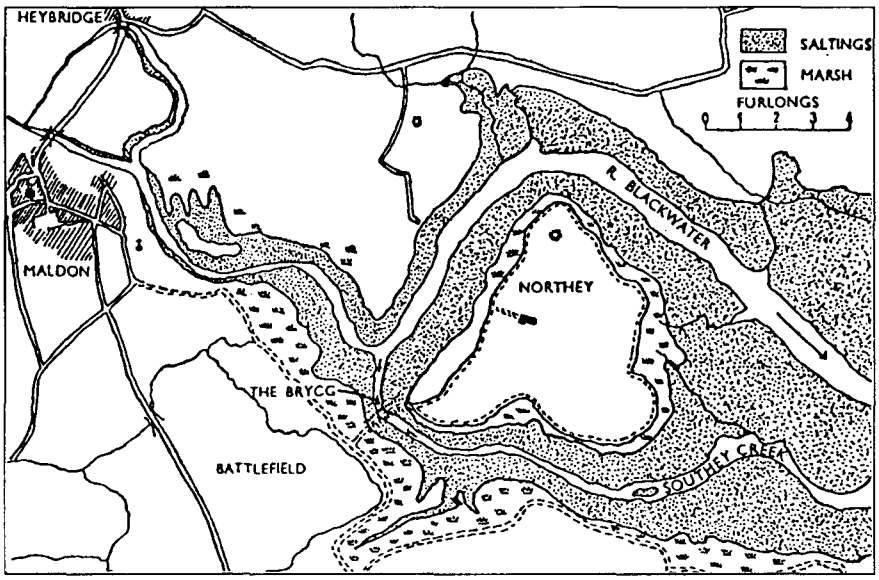
同じくオックスフォード大学の教授であったトールキン（J.R.R.Tolkien）の場合はどうだろうか。彼は若い頃、高名な英語学者であるヘンリィ・ブラドリー（Henry Bradley）の助手として *Oxford English Dictionary* の編纂を手伝い、後に Old English と中世文学の教授として、専門分野で大きな業績を残した。学者としてのトールキンを天才と呼んだ人もあるほど高い評価を受けたのである。創作を発表したのは、1937年、*The Hobbit* が最初である(これ以前に多くの詩を雑誌に掲載している）。その後、永遠のベストセラーと呼ばれる *The Lord of the Rings*（第一部、*The Fellowship of the Ring,* 1954年；第二部、*The Two Towers,* 1954年；第三部、*The Return of the King,* 1955年）を頂点として、いくつかの小品が発表され、さらに死後、1977年に子息クリストファー氏の編集によって、トールキンの創作神話である *The Silmarillion* が出版され、トールキンは学問と創作の両分野に巨人として足跡を残すことになったのであった。

このような英文学者であってみれば、学問と創作との関わりがより直接的であろうと思われ、興味も増して来るというものである。事実、この方面での研究もあって、たとえば、*The Lord of the Rings* の固有名詞に着目してＯＥに於ける意味を解明する試みもあれば、[1]より広い範囲で「名前探し」を楽しむ人もある。[2]これも宝探しのような胸の躍る歓びであるに違いない。が、それは、その方面の得意な人にまかせるとして、ここで考えてみたいのは、トールキンの学問と創作の接点とも言うべき *The Homecoming of Beorhtnoth Beorhthelm's Son*[3] なのである。これは、ＯＥで書かれた叙事詩 *The Battle of Maldon*[4] の続篇としてトールキンが試みた創作である。

I

991年の夏、イプスイッチ（Ipswich）を荒らしたヴァイキングがエセックス州に襲来して、モールドンの近くで熾烈な戦いが行われた。攻め寄せたヴァイキングのリーダーは、一説によれば、後にノールウェー王となったオーラーヴ・トリュグヴァソン（Olaf Tryggvason）であったとも言われている。[5] 迎え撃つサクソン人は群を抜く長身が目立つ白髪の老将、エセックスの

州長ビュルヒトノス（Byrhtnoð）であった。強大な勢力を持ち、老いたとはいえ勇敢で優れた武人である。次の図のように、[6] ヴァイキングは島に陣取り、川をへだててサクソン人が守っていた。ヴァイキングは巾約2メートル半、長さおよそ70メートルほどの bricg（＝causeway）を渡らなければ攻めて来られないために、選り抜きの戦士が決然と「なわて」を守っている英軍に対して不利な状況にあった。



戦いのかけひきにたけたヴァイキングは、なわてを渡らせてほしいと申し出る。ビュルヒトノスはプライドから挑戦に応じて川を渡らせてしまう。彼は有能に戦闘を指導し、味方を励まし、自らも勇猛果敢に戦うのであるが、多くの傷を負って遂に討死する。それを見て、臆病にも逃げ出す者もあった。残った戦士たちは、老人も、年端も行かぬ少年も勇気を示し、愛する主君の仇を討とうと、武人も農民も、人質までも [7] 雄々しく戦い続けたが、戦いに馴れたヴァイキングの、しかも大軍を相手にして、次々と戦死して行くのであった。

以上が *The Battle of Maldon* に歌われた事柄である。ＯＥの叙事詩といえば誰もがあの有名な *Beowulf* を想い、 *The Battle of Maldon* は、その陰に隠れているかのように見えるのは残念なことである。*The Battle of Maldon* は僅か325行の断片が残っているにすぎない。詩の始まりも結末も失われてしまっている。主人公の青年期から死までを歌った長編叙事詩 *Beowulf* とは事情が違う。とはいえ、*The Battle of Maldon* にも利点はある。エピソードが多く、やや散漫な印象を与える *Beowulf* に比して、一貫して緊迫した戦闘を格調高く歌った *The Battle of Maldon* は、より凝縮した形で表わされた英雄叙事詩と言えるからである。

この詩は大部分が戦闘の描写に費やされ、また、その半分近くを主人を失った臣下の武人たちの奮闘と戦死にあてている。そこに再現されるのは、死を恐れぬ武人の勇気、槍をさされても剣を取り、部下を激励する壮絶な死と、主君を愛し、忠誠を尽し、主君の弔い合戦のために一歩も退かず、共に倒れる勇士たちの死に様である。[8] ここにあるのは、ゲルマンの伝統たるヒロイズムである。そのヒロイズムの「最も美しい表現」[9] が、ビュルヒトノスの年老いた家臣の口から語られる。あまりにも有名な一節ではあるが、英雄的精神を見事に表現しているので次に引用したい。

"Hige sceal þe heardra,　heorte þe cenre,
mod sceal þe mare,　þe ure mægen lytlað. ...
Ic eom frod feores;　fram ic ne wille,
ac ic me be healfe minum hlaforde,
be swa leofan men, licgan þence." [10]

"Courage shall grow keener, clearer the will,
the heart fiercer, as our force faileth. ...
Though I am white with winters I will not away,
for I think to lodge me alongside my dear one,
lay me down by my lord's right hand." [11] (現代英語訳)

これほど愛されたビュルヒトノスとは、どんな人物だったのかと興味が湧いて来る。彼はエセックス州の州長であったが、現在のエセックス州のほかに7つ以上の州を持つ、英国で屈指の領主であった。さらに王の信頼厚く、教会の支持を受け、多くの有力な友人を得て指導者として人望が高かった。背丈高く（6フィート9インチあったという）活発で、頭の回転が速く、雄弁でもあったらしい。厚い信仰心から数多くの教会や僧院に寄進を続けた。イーリー（Ely）の教会とは特に親密だったようである。ヴァイキングが彼の首を持ち去ってしまったために、イーリー教会の僧たちは首のない遺体を戦場から持ち帰って、頭があるべき所に丸いロウの塊を置いて埋葬した。ときにビュルヒトノスは65才の高齢であった。遺体は12世紀と18世紀に移葬されたが、その時の報告によれば、鎖骨までも切断寸前であったという。[12]

サガに表われた北欧人の戦闘ぶりはものすごく、ブリテン島の人々が敗れたのは無理もないと思うのであるが、不安な社会にあって優れた強力な指導者ビュルヒトノスを失った人々の絶望は、いかほどであったろうか。そして、折角の地の利を捨ててなわてを渡らせなければよかったものを、という甲斐のない悔いも分からぬではないのだが·····。

II

前にも述べたように *The Battle of Maldon* は断片である。次々と倒されて行く激しい戦闘の中で突然に跡切れてしまうこの英雄詩の読者は、その結末が読めないことが口惜しい。この先は負け戦さの終結だけだと分かってはいるが、なお、心が残るのである。そこで、その続篇を試みたのがトールキンであった。

The Homecoming of Beorhtnoth は戦いが終った日の深夜の戦場で始まる。イーリー教会の僧によって遣わされた若者（詩人の卵）と、戦闘経験もあるらしく、分別もある老農夫との対話によって構成されている。彼等はビュルヒトノスの遺体を探しに来たのである。若者は *Beowulf* や北欧神話を熟知してヒロイズムに憧れている。まだ実戦の経験はない。想像力がゆたかにあると同時に、差し迫った場合には剣を使うことも出来る。一方、農夫は徹底した現実主義者であり、不必要な殺傷を嫌う平和主義者である。

二人は小さな灯火をたよりに、知人の遺体を見付けるたびに嘆きながら、積み重なった死体

を調べ、遂にビュルヒトノスの遺体を見付ける。ただちに若者の口から主君への賛歌が歌われる。

From the world has passed
a prince peerless in peace and war,
just in judgement, generous-handed
as the golden lords of long ago.
He has gone to God glory seeking,
Beorhtnoth beloved.[13]

他方、農夫の目は主君の遺体の損傷に向けられる。

He is marred cruelly,
Few tokens else shall we find on him;
they've left us little of the Lord we knew.[14]

若者も戦傷の悲惨さに打たれはしたものの、またすぐ叙事詩の世界に想いを馳せ、塚を築き、名を残そうと望むのだったが、 'Beorhtnoth we bear not Beowulf here' と素っ気無くたしなめられる。農夫を悩ませているのは、主君の遺体がひどく重くて運びにくいことなのである。

二人は、戦場の悲惨さの代表とも言うべき、死体から価値ある物品を奪う盗人たちを追いはらったりしながら、ようやくなわての近くまでたどり着く。なわての入口にあまり死体がないことから、どうやってなわてを渡ったのかという疑問が湧き、例のいきさつが、ここで明らかにされることになる。

やがて、疲れた若者は「主君の遺体を長枕にして」荷車にゆられつつ夢を見る。彼は時の破壊力によって何もかも滅び去ることを悟ったのであったが、それでもなお、ビュルヒトノスのミサを夢みると、次のように歌うのであった。

Heart shall be bolder, harder be purpose,
more proud the spirit as our power lessens ![15]

引き続いて、イーリー島[16]の僧たちの祈りの声の中で、この詩は結末に向かう。

さて、まず表現という点からみると、トールキンはＯＥの叙事詩の伝統に従っている。可能な限り頭韻を用い、全体の約３分の１が頭韻であろうか。そして、ときに多少の不自然さを感じる場合はあるにしても、頭韻の採用は、おおむね成功であると思う。さすがにトールキンは言葉の達人である。散文の名手である彼は詩の領域においても円熟した。*The Homecoming* は、力強い、かなり良い詩であると私は思う。さらに、ラテン語の祈りの間にはさまれた次の二行の詩

Sadly they sing, the monks of Ely isle !
Row men, row ! Let us listen here a while ![17]

が脚韻をふんでいるのは、英雄詩の頭韻が衰えていくことの前ぶれである。[18] 頭韻から脚韻に移行する長い時の流れを、中篇の詩の中で、さらりと行って見せてくれたわけで、ここにも学識が創作を助けている例が見られる。

また、トールキンは、若い詩人の口から自然に出て来るという形をとって、叙事詩や神話などを持ち込んだ。それも表現に影響を与え、たとえば、神話に多く用いられているシミリーを意識的に使っている。'as eager as fire, and as staunch as steel', 'the fire flaming as a far beacon', 'a shadow darker than the western sky' などであり、詩の雰囲気作りに役立っていると言えよう。

英雄詩の伝統はここまでで、これからトールキンの特性が現われてくる。まず、詩の構成に着目したい。若い詩人（の卵）は、敗戦という辛い事実の真只中にあっても、主君への愛を歌い、精神の高揚を試みる。が、積み重なった死体を調べるために助力をたのまれると現実に引き落とされる。しばらくは若い戦士達の死を悼んで若者と老農夫の気持ちは共に沈む。けれども、また、たちまち詩人の心は英雄崇拝へ向かう。すると、すかさず英雄になることがいかに至難であるか、次の言葉によって冷や水をあびせかけられる。

> Bitter taste has iron, and the bite of swords
> is cruel and cold, when you come to it. [19]

そして、主君の遺体を見付けた衝撃は二人で共有したのであるが、詩人が主君への賛歌を歌いあげ、農夫は詩人の心を現実に引き下ろし、遺体の運搬という差し迫った仕事を思い出させる。このように、若い詩人がヒロイズムに舞いあがろうとし、老農夫がそれを現実のレベルに引き落とし、しばし、同じレベルを共有し、また舞いあがり、という形を繰り返すのが全体の構成である。農夫は意地悪をしているのではない。戦いの酷さをよく知っているだけに、歌と現実との落差を若者に気付かせたいのである。そして、何よりも、主君の遺体をイーリーへ持ち帰らなければならない。

若者は何度引き下ろされても懲りずに舞いあがっている。若さの特権であろう。さらに、実戦の体験がないことが強調されている。彼にとってヒロイズムは漠然とした憧れのようなものであろうか。だから主君のために塚を築いて宝物を副葬しようなどと考えるのである。Beowulf の埋葬のように、岬の先に塚を築き、騎手たちがその周りを廻り、挽歌を歌う有様が頭の中に思い描かれているのであろう。実際には、敬虔なキリスト教徒であったビュルヒトノスは、イーリー教会に埋葬されたのであったが。

ところで、中世において、詩人は実戦にどこまで参加したのだろうか。詩人の役目は、戦死した武人たちを歌によって現在に蘇えらせることである。そのためには、ある程度まで実戦に参加する必要があると思われる。[20] *The Homecoming* の若い詩人も、まもなく戦場に行くらしい気配がある。とはいえ、最前戦で戦って殺されてしまったのでは、死者を悼む歌を歌う者が居ないことになる。ある所までは剣（槍）をふるうが、同時に観察者でもある、というところであろうか。ここで思い出すのは、ローズマリー・サトクリフ（Rosemary Sutcliff）の *Knight's Fee* に登場する魅力的な吟遊詩人のことである。彼は主君に対してかなりの影響力を持つらしい。その彼が軽い気持から助けた少年と年月を経て再会する。詩人は戦いに敗れて捕虜となったのである。武人ならば討死する時代であろうが、そこまでは戦わない。しかし、いさぎよく死を迎える覚悟はできているらしいこの吟遊詩人に中世の詩人の立場を垣間見るのは間違いであろうか。[21]

次に、詩の主調となる精神であるが、すでに述べたことからも察せられるように、ＯＥ叙事

詩のヒロイズムとは異なったものになっている。英雄の世界は遠い憧れのように若い詩人の頭の中にはある。が、そこに近づこうとするたびに厳しい現実に足をひっぱられるのである。ヒロイズムへの憧れは美しいが弱々しく、苛酷な戦乱の時代を生きる現実主義には歯が立たない。老農夫は言う。「遺体を枕に眠ればいい。死んだ者は重い頭が乗ったとて困りはしない。」それはひどいと抗議した若者ではあったが、やがて、その通りに眠り込んだらしい。

それにしても、農夫のビュルヒトノスに対する態度には、いくらか冷たさが潜んでいるように思われる。トールキンの考えがここに表われているわけで、次のような言葉で農夫に表現させている。

> our lord was at fault,
> or so in Maldon this morning men were saying.
> Too proud, too princely ! ...
> He let them cross the causeway, so keen was he
> to give minstrels matter for mighty songs.
> Needlessly noble.[22]

この引用文では主君を激しく非難しているわけではないが、なわてを渡らせたのが間違った行為であることは、はっきり示している。*The Battle of Maldon* は、この行為をあからさまに批判してはいないが、トールキンは *The Homecoming* に続く 'Ofermod' の章で、それは愚行であり、死をもっても完全には償うことができないと非難している。[23] とはいえ、前述したように、詩の中では激しい非難は避けた。その代わりに農夫の口を借りて、平和主義を繰り返させたのである。それによって、間接的にビュルヒトノスを批判することが出来たのであった。

周知のように、トールキンは一次大戦で多くの友人を失った。その悲しみを生涯忘れられなかったという。それは、戦後20年近くたっても戦死した友人の老母を慰めに訪れたことからも察せられる。[24] *The Homecoming* 全編に、若者が成人するいとまもなく失われて行くことへの悲しみが流れている。ヒロイズムと忠誠の化身ともいうべき、ビュルヒトノスの老いた家臣への言及は一度もなく、まるで若者ばかりが死んだかのように、若い死者たちが強烈な印象を与えているのである。

The Lord of the Rings は英雄詩の世界と、ホビットの住む世俗的、日常的な世界との不思議な融合物だと思うのであるが、*The Homecoming* の二つの世界は、ぶつかりあい、それによって互いに他を意識することはあっても、遂に融合することなく終ったのであった。

III

The Homecoming は英雄詩とは言い難い。擬似英雄詩とでも呼べばよいだろうか。 前述の如く、良い詩である。詩劇としても、緊張と緩み、恐怖と悲哀を巧みに配し、はるかな時の広がりの中に祈りでしめくくる見事な技巧である。小品ではあるが、佳作として評価したい。

この作品は1953年に出版された。*The Fellowship of the Ring* が出版される前年であるから、20年近くかかった *The Lord of the Rings* 執筆の終り頃に書かれたと思われる。すでに創作の技術も

コツも、すっかり身に着けた円熟した創作者の作品である。長年にわたる学問と創作の、ひとつの到達点と言ってもいいだろう。

ところで、*The Homecoming* は、かすかに人影が見える薄暗い舞台に、ときに弱い光を使い、音響効果と歌を伴なった吟唱として意図されたものであったが、上演されたことはなかったそうである。[25] ふと、イエイツ（W. B. Yeats）の場合を思い出す。私はアイルランドの西海岸、スライゴウ（Sligo）の町で、イエイツの最も優れた劇である *Purgatory* の舞台を観たことがあった。木を暗示する板切れ一枚のほかは何もない真っ暗な舞台に、老人と少年が一筋の光で照らし出された。老人の心の闇と舞台の闇が重なり合って限りなく広がって行き、恐ろしいほどの迫力があった。トールキンのこの作品も、暗闇を生かして効果的な吟唱が可能ではあるまいか。

トールキンは、その気になれば、詩劇の分野にも優れた作品を残すことが出来たと思う。イエイツに劣らぬ詩劇が書けたかも知れない。その後、彼が、長い間とり組んでいた創作神話の完成に力を注ぎ、詩劇に手を染めることがなかったのが残念でならない。

注

1. John Tinkler：'Old English in Rohan' in *Tolkien and the Critics*, ed. by Neil Isaacs and Rose Zimbardo, (University of Notre Dame Press, 1968).
2. リン・カーター著『トールキンの世界』(晶文社、1977年)。第14章、第15章参照。荒俣宏氏の解説にも名前探しの例が挙げられている。
3. J.R.R.Tolkien：*The Homecoming of Beorhtnoth Beorhthelm's Son*, (George Allen & Unwin, 1975). (First published in 1953 in *Essays and Studies* 1953) 以下 *The Homecoming* と略記する。
4. E.V.Gordon (ed.) *The Battle of Maldon*, (Manchester University Press, 1976). (First published in 1937) ちなみに E.V.Gordon はトールキンのリーズ大学在職中の同僚であって、二人は共同して *Sir Gawain and the Green Knight* を出版した。
5. オーラーヴ・トリュグヴァソンは、ハーコン王の後を継いでノルウェー王となった。『オーラーヴのサガ』の主人公、『ラックサー谷の人びとのサガ』にも登場する。
6. E.V.Gordon (ed.)：*The Battle of Maldon*
7. Fred C. Robinson：'God, Death, and Loyalty in *The Battle of Maldon*' in *J.R.R.Tolkien, Scholar and Story-teller*, ed. by Mary Salu and Robert T. Farrell, (Cornell University Press, 1979), p.93.
8. 戦いの描き方はいろいろある。ケルトの古歌『オシァン』は、戦いについては、かなり手短かに語り、『サガ』になると、「腸がずるずる出る」などというグロテスクな写実である。*The Battle of Maldon* の戦闘は、リアルではあるが、ある所まで来ると、フッと省略されて、倒れて死ぬ記述に移る。勇士の英雄的な死を描くには、不快な写実は避けなければならないのだろう。中村徳三郎訳『オシァン』岩波文庫。
9. J.R.R.Tolkien：'Ofermod' in *The Homecoming*, p.169.
10. E.V.Gordon (ed.) *The Battle of Maldon*, ll.312-13, ll.317-19.
11. Michael Alexander：*The Earliest English Poems*, (Penguin Classics, 1977), p.123.
    ちなみにトールキンは、最初の二行を次のように訳している。

    Will shall be the sterner, heart the bolder,

spirit the greater as our strength lessens.

12. cf. E.V.Gordon (ed.)：*The Battle of Maldon*
    Michael Alexander：*The Earliest English Poems*
13. *The Homecoming*, p.157.
14. *Loc. cit.*
15. *The Homecoming*, p.166.
16. 現在のイーリー大聖堂は小高い丘の上に建っている。ケンブリッジ州あたりの低地地方は昔は沼地で、カヌート王（r.1016—35）が舟で通った頃には、イーリーは沼の中にある島だったという。だから今も the isle of Ely と呼ばれている。*The Homecoming* の結末で、ラテン語の祈りの間に 'Row men, row！' とあるのは、すでに舟に乗っているからと考えてよかろうか。
17. *The Homecoming*, p.167.
18. *Ibid.*, p.152.
19. *Ibid.*, p.156.
20. *The Battle of Maldon* の作者は、その場に居なかったようであるが、ベテランの詩人であって、すでに戦闘経験はあったのであろう。
21. Rosemary Sutcliff：*Knight's Fee*, (Oxford University Press. 1973).
22. *The Homecoming*, p.163.
23. 'Ofermod' in *The Homecoming*, p.171.
24. John & Priscilla Tolkien：*The Tolkien Family Album*, (Harper Collins, 1992), p.41.
25. 'Ofermod', p.168.

付記　戦場の地形であるが、潮が満ちて来ると causeway は水没したので守りに有利であった。causeway は「なわて」と訳したが、湿地や浅瀬などに土を盛り上げて作った土手道である。低地地方には、このような道がけっこうある。